



# 道頓堀リバーフェスティバル 第8回 関西演芸しゃべくり話芸大賞

**実 施  
概 要**



マイク一本で  
勝負やでっ!

## 開催主旨

「話芸とは、会話のおもしろさと言葉のおもしろさを磨き、芸にしたもの」  
関西演芸推進協議会主催による第8回の賞レース。  
予選を勝ち抜いた10組による大会本選で関西演芸しゃべくり話芸大賞を決定します。

開催日時 会場	予選会場 令和元年9月14日・15日 12時～20時(予定) <b>ZAZA POCKET'S</b> (会場定員50名) 大阪市中央区道頓堀1-7-21 中座くいだおれビル地下1階 (TEL:06-6212-3005)
	大会本選会場 令和元年10月12日 14時～17時 <b>YES THEATER</b> (会場定員326名) 大阪市中央区難波千日前11-6 なんばグランド花月ビル (TEL:06-6630-0220)
参加資格	プロ・アマ・年齢問わず(18歳未満の方は親権者の同意を得てください)
演目	話芸(漫才・漫談・スタンダップコメディetc) マイク一本で勝負できる芸
審査方法	① 持ち時間は <b>1組4分以内(本選は7分)</b> :オーバーすると減点対象となります。 ② 審査基準は、「もう一度聞きたい!」と思わせるかななどを総合して審査します。
本選審査員	・大池晶(漫才作家) ・本多正識(漫才作家) ・林千代(シナリオライター) ・乾龍介(フリーアナウンサー) ・中井政嗣(関西演芸推進協議会 専務理事) 順不同 (予選は、関西演芸推進協議会 関西演芸しゃべくり話芸大賞実行委員会により審査します。)
表彰	しゃべくり話芸大賞 1組(賞金300,000円+10月13日(予定)/道頓堀リバーフェスティバルステージ出演権) 準 グ ラ ン プ リ 1組 (賞金100,000円) 特 別 賞 数組 (賞品) <span style="color:red">※本戦を動画配信します!</span>
参加費	2,000円 令和元年7月31日までに指定口座に入金。もしくは電話確認の上、事務局まで。
参加方法	① 別紙エントリーシートにご記入の上、ご郵送をお願い致します。※先着250組 ② 参加費のお振り込み

**募集期間 令和元年7月1日～令和元年7月31日 必着**

## 主催 : NPO法人 関西演芸推進協議会

〒556-0017 大阪市浪速区湊町2丁目2番45号 オンテックス難波ビル7階

千房(株)内「関西演芸しゃべくり話芸大賞」係 担当:重光

TEL:06-6633-1430 FAX:06-6633-1435

http://www.walive.org E-mail: info@walive.org 関西演芸しゃべくり話芸大賞実行委員会



# 道頓堀リバーフェスティバル 第8回 関西演芸しゃべくり話芸大賞

面白いものは百年経っても面白い!良いものは百年を越えて残る!  
そんな「関西のしゃべくり話芸」を今見つけたい!

「第8回関西演芸しゃべくり話芸大賞」を開催いたします。  
漫才、コント、漫談、浪曲、講談…プロアマ、形式や人数には一切こだわりません。  
ルールはたったひとつ「マイク一本で勝負できること」

笑いの基本話芸を極めるこの大会から  
未来のお笑い界の担い手が現われるのは  
間違いないと思います。  
熱い戦いを期待しています。

大池 晶 (漫才作家)

話芸の極意は内容のある話しをスピードと間で  
進め加えてフレッシュさと笑いに対する熱意。  
ネタに共感が感じられればお客様は満足する。  
笑いの創意・工夫を尊重し合い競って欲しい。

林 千代 (シナリオライター)

どんなにおもしろいネタであっても、  
きちんと伝わらなければ笑いには  
つながりません。  
お客さんに、しっかりと  
「言葉」が伝わるよう、届けられるよう、  
稽古に励んで下さい!

本多 正識 (漫才作家)

審査員の方からの  
メッセージです

大会の審査をして思うことは、  
この話芸の上手さは  
天才か素質か努力か場数なのかと。  
いずれにせよ、決勝戦の重圧を越えての戦いに  
勝ったものこそスターの座を与えられるのだ。

中井 政嗣 (関西演芸推進協議会 専務理事)

日本人ほど笑いを大切にしなければ。。  
天照大神は、外の笑い声が気になりそっと天  
岩戸を開けました。そのお陰でまた世の中が  
明るくなったのです。日本は「笑い」で救われ  
たのです。笑いを生み出す話芸は日本を救う。  
ちょっとオーバーですが。

乾 龍介 (フリーアナウンサー)

## 演芸の原点は「お話し」

私達関西演芸推進協議会は安易なギャグに頼らない笑い、心地のよい語りを見つけだし、  
言葉の力、話の魅力、話芸の素晴らしさを伝え残したいと考え、活動を続けています。